

各中隊それぞれ北部ルソンの山野に死闘。

九月十四日終戦後約一カ月を経て、キャンガンにて山をおりたる第三中隊十数人、第一二七飛行場大隊四〇六人、マニラ及びバガバックにて補充、配属されたる将兵約一〇〇、計五〇〇余人中、内地に生還したるもの全てで三十七人のみであった。

特攻隊戦記

愛知県 柴田 勲 人

大東亜戦争を語るとき、特攻隊を語らずにはいられない。当時の特攻隊員はどのような考え方、行動をしてお国のために死んでいったのか。私なりに体験したこと、感じたことを後世の皆さん方にお伝えしたい。

まず、特攻隊といえは予科練をはずすことはできない。なぜならば、この戦争で特攻隊員として戦死した人は四千三百七十九人、そのうち海軍が二千五百三十五人、その中で三分の二以上の方が予科練出身者、す

なわち私の先輩達である。私が町長さんはじめ町の名士、並びに近所の方々や小学生の生徒さんたちに、日の丸の小旗を振り歓呼の声で送られて鹿児島海軍航空隊に入隊したのは、昭和十九年六月一日、海軍二等飛行兵になったのは十六歳と五カ月であった。

入隊と同時に非常に厳しい訓練が始まった。普通学としては国語、数学、英語、物理、地理などで、軍事学としては航法、運用、通信、通信には無線、手旗、旗流、手先、体育には海軍体操にフラフープ、それから夏は水泳と、徹底的にしほられ一日一日がくたくたである。

海軍ではすべての行動が全体責任であり、誰か一人の訓練生がヘマをすると、夜十時過ぎの巡検後に、廊下へ全員整列が掛かり、ビンタは常時、ときどき精神注入棒（野球のバット）で尻を力いっぱいぶん殴られ紫色に尻が腫れるのである。風呂に入った時など誰が何発殴られたかすぐ分かるし、お互いに痛かった話などしたものだ。寝る時など上を向いて寝られず、横を向いて寝た夜も幾晩かあった。

訓練も順当に進み、大事な操縦別試験には操縦分隊に入る事ができた。昭和二十年一月一日、上等飛行兵に進級した頃にはだいたい日本の旗色が悪くなってきたと感じられるようになっていた。

昭和二十年二月上旬頃、司令部より「柴田上等飛行兵は鹿屋海軍航空隊に転属を命ず」という辞令を受け、夜十時頃、練兵場横の海岸より船に乗り、鹿児島湾を斜めに横切って古江港に上陸、徒歩で約三十キロの道程を歩き、夜明け前に鹿屋航空隊に入った。二月上旬とは言え寒いとは感じられなかったし、星空が非常にきれいな夜だったと記憶している。

私は入隊前に三菱発動機製作所に勤務していた経験があるので、転属後、爆撃機（銀河）、戦闘機（零戦）、B29迎撃戦闘機（雷電）、夜間戦闘機（月光）、偵察機（彩雲）等の出撃準備の手伝いに回され、各方面の作戦に貢献したと自負している。先輩達が「レイテ湾作戦」「沖縄作戦」に出撃して行く姿を見ては、「あー、俺も戦闘機に乗って戦場に行きたいなあー」と思ったことも度々あった。

ここで、私の一番印象に残っている出撃状況を披露し、亡き先輩を偲びたいと思う。

昭和二十年三月下旬頃と覚えているが、特別攻撃隊である梓隊に出撃命令が出たのは出撃前日の昼頃、内容は次の通りだった。

一 目的は日本近海（沖縄近海）を遊弋する敵機動部隊がウルシー島に帰投するところを特攻する。

二 編成は銀河（八〇〇キロ爆弾搭載）二十四機、ほか戦闘機（零戦）・偵察機（彩雲）に守られ出撃。

三 発進基地は主力は鹿屋航空基地、ほかに鴨池航空基地（これは鹿児島基地）。

私は銀河五番機に付き添い、爆弾の装着その他、機銃の弾の搭載と整備に当たった。機長は大阪出身の湯浅上飛曹と、関西出身とだけ聞いた都二飛曹で、各飛行機の近くで関係者が輪になり酒を飲み、お菓子や缶詰を食べ、手拍子で歌を唄い雑談にふける。話中にちらりちらりと湯浅上曹や都二曹の顔を見ると、平然

としていつもの顔と変わらぬ。私の脳裏には「あー、この先輩は夜明けと共に出撃し、再び生きてはまじ帰れない。なれど、なぜ平然として私達と一緒に飲み食いできるのだろうか。もしこの光景を親が見たら何と思うであろうか。特に都二曹は十九歳前である」とあれこれ考えているとき、「おい柴田、貴様も一つぐらい歌えよ」と、ご指名。「はい、先輩、一つ歌わせていただきます」と、歌った。

♪海行かば 水漬く屍

空行かば 雲むす屍

大君の辺にこそ死なぬ

かえりみはせじ

「先輩もう一曲いいですか、下手ですが」

♪貴様と俺とは同期の桜

同じ二十二期の枝に咲く

咲いた花なら散るのは覚悟

見事散ります君のため

♪貴様と俺とは同期の桜

離ればなれになろうとも

花の都の靖国神社

今度会う日は国のため

なんだか涙が出てしまった。湯浅上曹が「おい柴田、貴様の声は泣き声ではないか。何だ男らしくもない、予科練精神はどうした。人間一度は死ぬんだ、ただ早いか遅いかの違いだけだ」「先輩、私も必ず後から行きますよ、靖国神社で待っていてください。今度会ったときには『柴田、貴様も来たか。よくやったな、あの世から見えていたぞ』と誉めてください」「馬鹿者。柴田、死ぬのは最後の手段だ、慌てるな。できる限り命は大切に、長く御国のために働け。よいか、これは先輩としての遺言だ。貴様に形見はやれないが、今の言葉はしっかり覚えておけ」後は、小声で「死ぬのは俺達だけで結構だ。さあ、楽しく飲んで歌おう」。この時、湯浅上曹は、もう敗戦を予知していたのだろうか。

十時過ぎ頃か「さあ、明朝は出撃だからぐっすり寝ておこう。もう切り上げだ。私はその晩、先輩やその家族のことを考えると朝まで寝付かれなかった。

夜明け前、未だ暗いうちに飛行場へ行くと、新兵達が片付けたのか、昨夜の焚き火の後や飲み食いの後はきれいになっていた。もう湯浅上曹や都二曹は飛行服に身をかため、鉢巻きには日の丸に必勝の文字がくつきりと浮かんでいた。「おい柴出、俺は五番機だからな。良く見ておけ、俺の出撃を」。私達関係者は爆撃機から離れると滑走路の横で、ある程度の間隔を開けて一列に並ぶ。次々に爆音をたて飛び立つ爆撃機、帽子を大きく振って見送る我々。空で編隊を組むまで何分ぐらいかかっただろうか、上空で一周した戦爆連合隊は南の空へ。私達は機影が見えなくなるまで帽子を振り続けた。心の中では、不忠かもしれないが「先輩、必ずこの鹿屋飛行場へ帰って来てください」と、何度も何度も叫び続けた。見送った後、我々は兵舎に戻って戦果の情報を待っていたが、ただ「この作戦は成功」とのみ聞かされ、ついに一機も「銀河」は帰ってこなかった。全員戦死とのことだった。

ここで、先輩達の辞世を少し披露しよう。

先輩の後を追ふて我ゆかん

君の御楯と國の護りへ

何のその吹雪も嵐ものりこえて

七つの海に今ぞ出で征く

父母置きて吾は今日より戦人

皇國の為に今ぞ出で立つ

まだまだ多くの先輩が辞世を残して戦場で散っていった。

昭和二十年七月上旬頃には飛行機は非常に少なくなり、私達は穴掘りや土方仕事が多かった。

私が終戦を知ったのは、昭和二十年八月二十日真夜中であった。八月十五日から敵機は一向に飛んで来ないので、飛行場で戦友達とのんびり過ごしていた。

八月二十日夜中〇時、総員集合がかかり広場へ集まった。分隊長より「我々は米・英と一時停戦状態に入れり。各人は身の回りの物だけ持って故郷へ帰るべし。武器は一切持たないよう。各班に戻ったら、すぐ支度して出発せよ」との命令であった。

班へ戻った我々は同期生と共に班長の所へ行き「班

長殿、日本は負けたのですか。もし負けたなら、幾多南の空で散っていった先輩達は何のために死んでいったのですか。我々は皆、この鹿屋航空隊で玉砕しても構いません。班長について行きますから」。事実、我々は死を覚悟していた。班長は、「いやいや、皆の気持ちはわかるが俺の知るところでは大君の心情が分隊長の言葉だ。皆一緒に帰ろう」。早速、荷物も少なくまとめ兵舎を後にした。

私達一行は班長（大阪出身の村上一曹）を頭に、大阪地方出身者五人と豊橋まで乗る私の計七人で鹿屋駅に行く。駅は復員兵でいっぱい、何万人の人だったろうか。その帰る途中、大きな事故を目撃した。都城駅から吉都線に乗った私達一行が、真幸駅に着いた時のことである。私達が乗ろうと思っていた列車が駅に向かって後戻りして来たので、おかしいなと思って車輪や車体を見ると、何と人間の腕や足が血だらけになってぶらさがっているではないか。駅員に聞いたところ、登りのトンネル内で列車が登りきれず戻って来たとのこと、私たちは班長を中心に相談した結果、翌朝

までに山越えをし隣駅まで歩くことを決め、一晩がかりで山中を歩き、翌朝八時頃駅に着き、人吉駅を経て八代駅へ向かった。

事故は、復員軍人を屋根の上まで満載した列車が、肥薩線の第二山神トンネル内で立ち往生し、汽車は石炭をどんどん焚いたので煙にまかれ、乗客は苦しくなり列車から飛び降りた際に転倒し、その上に人が重なり動きがとれず、腕や足・体がレール上にありながら無残にも列車は登りきれず後戻りし、多くの復員者が列車にひかれ、死者五十六人、負傷者数知れず、という状況だった。

こんな光景を見たのは昭和二十年八月二十三日正午頃の出来事だった。私達一行は、この列車に乗り遅れたために災難に遭わなかった。運が良かったとしか言いようがない。

八月二十六日午後、広島駅に着いたとき、広島市一面瓦礫の山。立っていたものは鉄骨があちらに一つ、こちらに一つ、本当に焼け野が原で何も無く、戦争の無残さを目の当たりに見た。

大阪駅のホームで班長はじめ戦友五人と別れた後、一人満員列車に揺られ豊橋駅へ向かう。豊橋駅に着いた時、ホームから旧吉田大橋の鉄橋が丸見えで市街は焼け野原だった。

考えてみれば乗車切符は持たず、復員証明書もない。仕方なくホームの柵を飛び越え、逃げるように姉（船町）の家に行く。頭から爪先まで真っ黒、姉が「どちら様ですか」と何回も聞き直したほどだった。

振り返ってみれば、八月二十日鹿屋を出てから姉の家に着くまで八日間、風呂は一度も入らず、ご飯を食べたのは一食だけ。着の身着のまま、よくも無事であったものだと不思議な気がした。

豊橋から白須賀へと帰ったのは八月二十八日夕方、お袋さんが泣いて「大変苦労したな、でも無事で良かった」と喜んだ姿が今でも目に浮かぶ。

私は若い人によく「戦争とは」、と聞かれる事があつた。私の答えは一つ、「戦争とは……人類の文化・資産を破壊し、人殺しを公然と行う行為である」、故に決して戦争はしてはならない。

戦後五十余年を過ぎ、現在の幸福を感謝しつつ毎日を暮らしている次第である。

航空情報連隊

—ビルマー—

島根県 天野 甚 市

私は農家の三男として生まれ、学校卒業と共に大阪の写真機具店に勤め、現像、仕上げの仕事に従事していた。昭和十六年十一月、突然徴用備令にて呉市の第一船舶工作廠に出頭し、そこで軍属宣誓を行い軍属として出発することになった。私の写真技術がこの船舶工作班に必要なのだ。

何分大東亜戦開戦以前のことで、国家機密が固く守られていたので、私自身何のことやらさっぱり判明しなかつた。当時支那事変中のことだから、事変に関連する軍務であろうかと考えていた。

私達は昭和十六年十一月宇品港に集結し、五〇隻に